

第1章

罪悪感が強すぎて、ほんとに吐きたくなる。

オスカルが教室に入ってくる。憔悴し、目の下に濃いクマができています。ぼくの知っていたあいつとは、陽気で楽しそうだった幼なじみとは、全然違う。同じ人だなんて、あれからたった数か月しか経っていないなんて信じられない。ぼくたちが親友だったなんて、まるで前世の話みたいだ。そして彼があんなふうになってしまったのはぼくのせいだなんて、もっと信じられない。

ほんの一瞬、目と目が合ったが、臆病なぼくはあわててそらした。オスカルが来るのを待ってなどいなかったかのように。オスカルもそんなことに気づいていないかのように。そして自分のやったことを恥じる気持ちが膿となり、ぼくの毛穴という毛穴から噴き出してなどいないかのように。オスカルは、ぼくのいちばん脆いところを見た人だ。たぶん世界でいちばん、ぼくという人間を知っている人。そんな人を、殺してしまった。以前のあいつがもう存在しないのは、その目から生命のきらめきが消えてしまったのは、全部ぼくのせいだ。

あんなことをしなければ、その生活は今まで通り続いていたはず。幸せいっぱいとはまではいなくても、少なくとも穏やかだったはずだ。ぼくのせいで起きたこの騒ぎで、彼が我慢する必要なんてない。ことを収めようともせずに、ただ指をくわえて見ていた自分……、親友を裏切ってしまった自分が恥ずかしい。罪悪感で胃が重い。獰猛で恐ろしい怪物に、じわじわと腹のなかを食べられているかのような。いっそのこと~~死にたい~~そうなりたいたいと、つい考えてしまう。そうなればきっと、もうなにも感じなくなるだろう。

問題は、その怪物が自分だということ。そしてどう頑張っても、獣の皮を脱ぎ捨てるすべはないということ。

教室の奥の席に歩いていくオスカルを見る。座る前に椅子を調べている。ガムがついていないか確かめているんだろう。それからリュックを開く。そこにはいつも教科書がぎっしり詰まっている。カルロスに、数学の教科書の表紙に落書きされてからというもの、決して学校に物を置きっぱなしにしなくなったんだ。カルロスがあんなことをするのを黙って見ていたこと、オスカルのリアクションを見てみんなと一緒に笑ったことを思い出し、また恥ずかしさがこみあげてくる。笑いたくはなかったけど、そうせざるを得なかったなんて言い訳にならない。吐き気がどんどん強くなってきて、今日は朝食を取らなくて正解だったと思う。教室の反対側にいるマルタと目が合った。その濃い緑の目のなかには、非難が込められているような気がする。目をそらし、また彼のほうを見た。

オスカルは物思いに沈んだ様子で、窓の外に目をやる。注意がほかに向いたのを利用して、だれにも気づかれぬように気を遣いながらも、じっと見つめる。ガラス窓の向こうの空は濃い灰色の雲に覆われていて、彼の顔もその色に染まっているように思えた。なにかによって生命力が少しずつ流れ出し、ゆっくりと、でも容赦なく、後戻りできない地点まで押しやられているかのように見える。

そのなにかがぼく自身だとわかってぞっとする。

歴史の教科書を取り出してからすぐ、チャイムが鳴った。フェルがオスカルになにごとかささやくのを見て、また胸がちくつとした。オスカルを失ったとき、フェルもまた失った。子どもころからぼくたちは切っても切れない仲で、これからもずっと友だちなんだと思っていた。トライアングルの三つの辺のように、ずっと一緒なんだと思っていた。三輪車の三つのタイヤのように。だけどそのひとつが壊れたらすぐ、ほかのも崩壊してしまった。~~殺して~~崩壊させたのはぼく、そして今のぼくたちはさしずめ、未完の曲のボツになった歌詞というところか。

オスカルは緊張しているようだ。その理由がわからないのがいやだ。いつでも、なにを考えているか知っていたいのに。心配事を話してくれないのがいやだ。いつでも、どんなことでも話してくれていたのは、前世のようにも思えるけど、ほんの少し前のこと。ぼくのせいでフェルとの間に緊張感があるのかもしれない、そう考えるだけでいやになる。フェルまでも失ってほしくない。これだけ大変な思いをした彼が、完全に壊れてしまわないためには、フェルが必要なんだ。

太ももを触っている。ポケットに入れているものを押しえつけているような動作だ。最近、よくああしているのがいやでも目に留まるが、なんのためなのかはわからない。そしてその動作に気づいたのは、認めたくはないけれど、必要以上に彼を見ているからだ。どうしてそんなに見てしまうんだろう、自分でもわからない。いや、たぶんわかってる、わかってるんだけど、ぼくは相変わらず~~くそたれ~~臆病で、認めることができないだけかもしれない。

第2章

家に入る前に笑顔を作る。

このごろは慣れてきて、そんなに苦労しなくても作り笑いできるようになってきた。もう長いこと仮面をつけてきたので、つけていないと、かえって変な感じがするほどだ。それはいいんだけど、問題なのは、仮面にひびが入りはじめていること。遅かれ早かれ、粉々に砕けてしまうときが来るとわかっている。

「ただいま！」玄関で叫ぶが、だれも答えない。居間に行くと、テレビが『ライオン・キング』のムファサを殺したヌーの大群のような轟音を立てるなか、祖母がソファで眠っていた。足元でロッキーが丸くなっている。「おばあちゃん！」

返事はないが、ロッキーが目を開け、すっと立ちあがった。戸口まで走ってきて、ぼくの前でごろりと仰向けになる。いつものようになでもらうのを待っているのだ。今度は本物の笑みを浮かべてかがみこみ、ダークブラウンの毛に手をうずめる。ほかのことはすべて最悪だけど、うれしいことに、これだけは変わらない。これまで生きてきたなかで大切だった人を、ぼくはほとんどみんな失ってしまったかもしれないけど、少なくともロッキーは、

これからもそばにいてくれるだろう。

祖母が小さいびきをかいたので、立ち上がってそばに行く。

「おばあちゃん……」呼びかけるが、テレビの音が大きすぎて聞こえないようだ。かがみこんで少し肩を揺する。「おばあちゃん！」

祖母はびくっとして、ぱっと目を開けた。

「びっくりするじゃないの！」

ぼくはリモコンをつかみ、テレビを消す。

「これじゃ、いつ耳が聞こえなくなってもおかしくないよ」そう言いながらも、つい笑顔になってしまう。

「もう、どうしようもなく耳が遠いわよ。さあ、こっちに来てキスしてくれ」

キスすると、祖母のふくよかな腕で抱きしめられた。慣れ親しんだ香りがして、あつという間に子ども時代へと引き戻される。出来立てのコロッケやプールの塩素のにおい、すごろく遊びをした夏の午後。父さんと母さんがまだここにいる、オスカルとフェルとぼくは永遠に友だちだと思っていた、今よりずっとよかった時代。

「そんなにテレビの音を大きくしちゃだめだよ」頭に浮かんだ思いを振り払うために、きつく言う。祖母はそんなぼくの頬をそっと、優しさを込めてたたく。しわだらけだけど、ぼくのとよく似た栗色の目は、愛情に満ちた光をたたえていた。

「はい、はい……」

「まじめに言ってるんだよ！ 考えてごらんよ、いつか、なにか起きても、聞こえないかもしれないんだ……」

考えもせず、つい出てしまった言葉だったが、後悔はしていない。父さんと母さんにあんなことが起きてからというもの、独りぼっちになるという恐怖は日々つきまとっている。それにオスカルのことがあった今ではなおさら、祖母とロッキーだけが残された唯一の砦だ。だけど祖母はもう年をとっている。いつかなにかが起きるかもしれない、祖母までも失ってしまうかもしれないと考えると……。

いやだ、そんなこと、考えるのもいやだ。この夏の記憶が脳裏をかすめる。はっきり思い出してしまう前に、なんとかその記憶を遠ざけようとする。

「心配しないで」祖母はまじめな顔になって言う。「テレビの音はもっと小さくするよ、約束する」

そして立ち上がった祖母に、もう一度抱きしめられた。さっきと同じくらいぎゅっと強く、そしてもっと長く。このあとなにをして遊ぼうかとか、次のポケモンゲームが発売されたらどれを最初のパートナーにしようかといったこと以外、悩みのなかった子ども時代に再び戻る。このまま、永遠にこの腕の中にいらればいいのに。でもそれは不可能だ。

「今日のごはんはなに？」ハグが終わって訊ねた。祖母が楽しそうに目を輝かせ、ほほえみながらこちらを見る。

「当ててごらん」

そのほほえみが意味するものはわかってる。ぼくの好きな料理を作ってくれたんだ。ぼくも笑顔になり、なんの料理か当てようとおいをかいだ。これは……トマトのにおい。そう、絶対トマトだ。

(ここまでの経緯：オスカルが新しい恋の相手セルヒオとデートしているところを目撃してショックを受け、自暴自棄になったダリオ。クラブで知り合った少年ホセに誘われ、一緒にトイレの個室に入ります)

ちょっとムツとして目を開けた。でも彼はほほえんでいる。それから少しずつ、挑発するかのように頭を低くしはじめた。

「え……？ マジで？」ぼくは消え入りそうな声で訊ねる。

「もちろん。どうしてそんなこと訊くの？」

肩をすくめただけで、返事はしなかった。それで彼はさらに頭を下げ、舐めはじめた。気持ちをこめて。

唯一の比較対象であるオスカルとは、はっきり言って全然違っていた。オスカルもうまかったけど、ぼくが初めての男なのはわかってた。オスカルはいつもためらい、遠慮がちで、不安そうだった。気持ちがこもっていたとは思うけど、自信がなさそうだった。けどこのホセにとって、これが初めてじゃないのははっきりしている。動きに迷いがなく、手慣れているんだ。力強くて、熱がこもってて、エネルギーギッシュ。死にそうなほど飢えていて、ぼくを丸ごと飲み込みたいと思っているかのようなようだった。ぼくも、そうしてほしかった。

それでも、オスカルのとくと違う理由はそれだけじゃないと、どこかで気づいてた。オスカルがこうしてくれるときは別のなにかが、ホセにないなにかがあった。ホセは自分自身のため、そしてぼくの体のためにこうしているが、ぼくのためではない。ただ、これが好きだからこうしているんだ。多分相手を楽しませようという気持ちはあるんだろうけど、それが一番の目的ではない。オスカルのとくと真逆だ。オスカルはぼくのためにしていた。オスカルが望むのはただ、ぼくを幸せにすることだけだった。こっちが彼を喜ばせることはなくても、オスカルはぼくを喜ばせたいと思っていた。そして最悪なのは、ぼく自身、これはいいことじゃない、オスカルに対して不公平だとわかっていたことだ。それなのに、なにも変えようとしなかった。

でも今は、すごく頭がくらくらしていて、もうそれ以上考えられない。だからただ、目を閉じて享受するだけにする。享受させられるだけにする。

どのくらい時間が経ったのかわからないが、何回か、あまりの心地よさに爆発しそうになり、結局、この喜びに身をゆだねようと思った。両手でホセの頭をつかんで勢いよく腰を振る。ホセは不平も言わず、されるがままになっている。彼のあげる、くぐもったようなうめき声に一層、狂おしさが募る。

しばらくそうしてしてから、ホセはほほを真っ赤に染め、目を見開いて立ち上がった。いつ脱いだのか知らないが、ズボンがくるぶしまで下がっている。激しくキスしてきて、それからポケットに手をやる。次の瞬間、手のひらになにかが置かれた。目をやると、四角いパッケージがあった。

「入れてくれ」

「なに？」

「おれに入れてくれ」

心もとなくなつて、辺りを見回す。

「ここで？」

「そうだよ」

「えーっと……」

「ほら、そうしたいんだろ」強い口調で言うと、ホセはぼくのを触る。うめき声が出た。

「でも……」

ホセはコンドームを取り上げ、かみちぎってパッケージを開けると、流れるような動作であつという間にぼくに装着した。これもオスカルとは全然違う、自信にあふれてきつぱりした動作だ。それからホセは背を向けて、身をかがめ壁に手をついた。

「来いよ」

©Naoko Muraoka

※原稿は作業中のものになります。完成版とは異なります。

たったひとりの家族に見捨てられないようにと、
ゲイであることを受け入れきれなかった少年の告白。
スペイン発『ぼくの血に流れる氷』の翻訳出版をめざす、
クラウドファンディング実施中！

